

ある雪の日

清水 パパ

2月5日、朝から雪がちらほら。今日は一日中雪が降り、大雪にでもなるのかなあと思っていたが、昼頃雪がやんだ。良介は雪合戦が出来ると思い「パパお外に行こう」と言って、自分で着替えをして外に出た。私が「雪が積もってないから、雪合戦は無理だよ」と言うと、「積もるってなあに」と尋ねた。4歳の良介に「積もる」という意味が分からなかったらしい。とっさに私は「積もるってことは、雪が白くいっぱいになることだよ」と、分かったような分からないような説明をして言い逃れた。まったく子供に「とっさに」分かり易く説明することは難しい。

午後2時頃ママが「美容院に行って来るから、パパと良介はお留守番してね」と言ったので、私と良介は久しぶりの二人だけの日曜日となり、どうぞ行ってらっしゃいとママを送り出す。

テレビを見ながら、ビーズ並べや、トミカのミニカー遊びにつきあってから、二人でドライブに出かけた。

「良介君、どこに行こうか？」と尋ねると、良介は「吉祥寺に行こうよ」と言うので、車は、清水町、荻窪、西荻あたりをウロウロした後、吉祥寺に向かった。善福寺あたりを過ぎた所で、良介はおもむろに車のフロントケースから葉書を取り出し（昨日行ったギャラリーの招待葉書に落書きしたらしい）、それを見ながら「次は井の頭公園だよ、こっちの方向は吉祥寺だよ」などと言って、私を誘導した。全く良介の言うとおりのので、びっくりした。

子供はいつも大人がしているしぐさを真似たいのだ。葉書を持った良介の格好は、大人がマップを見ている格好そのものだ。

吉祥寺は、良介が通っているドンチャカスクールがあるので、駅前の地理は良介の方が私より上だ。デパートに寄りたいたいと言うので入ろうとしたが、駐車場が満車だったので街の外れに来てしまった。そこを通ると“伊豆諸島の干物の店”があった。以前、青山の小林先生から伺った店である。干物専門の店で、本物の味の店であるという。ママは魚があまり好きではないので、こういう店には来ることがなく、今日は絶好の買い物のチャンスであった。そこで早速、小サンマの干物と、サヨリの干物を買った。

さらにちょっと行くと、植木と花の店があった。そこではイチゴの鉢植を買った。良介の最も好物の果物はイチゴだからである。いつも採り入れられたイチゴしか見たことがない良介は、青と赤の実がついた鉢植を見て大変満足した様子であった。

良介に「もうお家に帰ろうよ」と言われて、一路、車をとばして家に戻った。しかし、ママがまだ帰ってなかったの、良介は「ママの美容院に迎えに行こうよ」とせまった。もう一度、車を運転して近所の美容院の前に行ったが、どの美容院だかが分からなかったの、すぐ家に戻って来た。

家に戻るや、カーテンを閉めたり、鉢植の手入れをしたり、また干物を冷蔵庫にしまっている中、この小さなサンマはどんな味がするのだろうと思って、急に試食がしたくなり、小さな二匹をオーブンで焼きながら食べた。

そこにママが帰って来た。

帰るやいなや「良介、5時に帰っていなかったでしょう。電話をかけたのに。ちょっとの間もお留守番できないの？良介の好きなテレビ番組が5時に始まるのを教えようとして電話をしたのに」と言ってキャンキャン声で怒鳴りつけた。

寝耳に水という程、私にとっても、ましてや幼い良介にとっても、何でそんなに興奮して怒っているのかサッパリわけが分からない。私が若い頃は「何を言っているんだ。うるさい」と言って叱り返していたものだが、今は、くだらないことだな、と思って反発もせずにいる。しかし、良介はビクビクしていた。

さらに、グリルを見て「魚を焼いたでしょう。グリルには水を入れなきゃ駄目。良介、パパに言って頂戴」と言う。良介は言われたとおりのところに来て「パパ駄目よ」と私を叱る。その顔はまことに素直である。

ママのグチで内心イライラしていた私は、良介の素直な表情を見て、すっかり気持ちになごんだ。

大人は、ついつい子供にかこつけて自分の我儘やエゴイズムを出してしまうものである。しかし、子供は、邪気のなさで、大人の気持ちをなごませてくれる。積もった雪のように純白だと思った。